

時代
小説
自選集
第五卷

ごろつき船下

大佛次郎

大佛次郎時代小説自選集 第五卷

ころつき船(下)

昭和四十六年二月二十日 第一刷

定価 八〇〇円

著者 大佛次郎

発行者 二宮信親

発行所 読売新聞社

郵便番号 一〇四 東京都中央区銀座三の二の一

五三〇 大阪市北区野崎町七七

八〇二 北九州市小倉区明和町一の一

印刷所 凸版印刷株式会社

製本所 協和製本株式会社

ごろつき船(下)

装丁・題簽
見返し繪
中村 岳
佐多 芳
郎 陵

失 踪

「もしも……」

と、お美津は織江をしつかりと見据ていった。

「もしも、ほんとうに、そんなことがあったら、あなた、どうなさいます？」

織江は顔をあげた。散る花のように色をなくした顔色に海の深みを沈めた二つの目は、意外に静なものだった。

「死にます、あたし……」

「……………」

「そのほかにあたしに何が考えられましょう。みんな、あたしが悪かったからでございます……」

「そんな！」

お美津は、思わず強くいった。しかし、それから二人して黙り込んで目を見合せている間に、お美津の思案は別の方角に向った。お美津は、桐太郎が蒼ざめた顔附に切長の目を光らして自分を睨めているように感じた。こちらで弱くなつてはいけな思ふのである。

「そんな気の弱いことを仰有つて……あたしが心細くなりますわ。それに、これが、あなたの仰有るようなことが起るにしろ、

なにも、あなたがお悪かったからなんて筈がないじゃありませんか？」

「……………」

「ああ、わかりました。主水正さまのこと……あのことを仰有つておいでなんですの。そうですか？」

と、自分もほっと重い息を漏らした。

「そう仰有れば、あなたも生きにくく生れておいでになりましたのねえ。でも、織江さん……それだって、御自分で、求めてそうしていらっしゃるのじゃありませんか？ 負けては駄目です。もっとお強くなつて、何もかも乗切つて御自分とおして行くようになさるなければ。ほんとうにそうして行かなければ生きていけないんですもの。どっち途、苦しむことなら、自分の好むようにした方が苦しみ甲斐がありますわ。あなたは、ほんとうに御遠慮深いから……御自分の望みをあとにして、他人さんのことを先にお考えなさいますのね。それがお悪いのです。いろいろの御不幸がそれから来ていますの。あたし、どうしても、そうだと思ひます」

お美津の言葉はきはきしていたばかりでなく不思議な熱を持っていて、織江の胸に迫った。織江は顔を顰めた。ほんとうにこの親切な友達は、こちらの、いじけきつた心をはだかのまま摘出して、その言甲斐なく弱いところや悪いところを一々指さして、おだやかな口調で説いていくのである。

「そうじゃないでしょうか？」

お美津は繰返していった。

「あたしがお傍にいたのなら、多分、あなたに今のような苦しみはさせなかったのです。それだけがほんとうに悔しい。負けてはいけませんよ。あとになって、すこしでも、ああ、あの時ああするのではなかったと後悔するような御不安のあることは、どんなことでもなさるんじゃないやありませんよと、幾度でもいつてあげたのに。それが出来なかったのは、あたしもほんとうに悔しい。でも……今はもうよごさんすわ。こうして、あなたのお傍に附いていられるんですもの。あたし、一生懸命にお味方いたします。自分の大事な方を、今よりもっとお苦しめするなんて、あたし、とても見ていられないことですもの。御一緒に死ぬ気で闘って見せませわ。」

「……………」
織江は、声が出なかった。火のように熱い涙が目には溢れるだけである。その肩をお美津は抱いていた。それから口を耳にあてて、「しっかりするんですよ。……よごさんすか？ あたしが附いているんです。世間が何をいおうとびくともしたもののじゃありません。そんなことを怖しがっていたら生きていきませんもの。生きるのにも死ぬのにも、御自分のお心持を貫くことですわ」といいながら、急に美しい目を挙げて、あたりの気配を聞いた。

「死ぬのなら、好きな方と御一緒になさい、死んで終えば、それつきりですもの」とお美津には、織江に聞かせる言葉の準備が出

来ていた。しかし、それを相手の耳に自然なものに響かせるのは、まだまだ時でないように思うのである。

主水正は明け方近くなって戻って来た。起きて出た門番に、「喬四郎は戻ったか？」

と、第一に尋ねた。

まだお戻り遊ばしませぬ、と答えられて、その儘無言で玄関からあがった。出迎えた人々は一様に主水正の顔色の悪いことを認めた。主水正は、ひどく疲れた様子で、口をきくのも懶げに見えた。用人がすこし前にあった事件を話した時も、この夜陰に人の家へ斬込むような、あり得べからざる事件にも別段に驚きも憤慨もしないで、むしろ、覚円が留守中に来ているといわれて、はっと目をあげただけのことだった。

「どちらにいられる？」

と、訊いた。

「お部屋にお寝みになっていられます。先ほどまでお目醒めの様子でござりました。何様その騒ぎでござりましたので」

主水正は、真直ぐに覚円の寝ている部屋へ行った。

引戸をあけると、軒が歇んだ。

「御坊！」

主水正は、なつかしきの滲み出た声で言った。この坊さまこそ、今の主水正が、全世界で誰よりも会いたいひとだった。

「おお」

覚円は悦ばしげに起上つて来た。

「戻られたかな。ずっとお待ちしていたが、知らぬ間にうとうと
していたところじゃ。どれ、灯をつけましょう」

闇の中で覚円は、行燈のありかを探っている。主水正がふと思
い出したのは、遠い万昌院の覚円がいた粗末な僧房である。場所
は違つても、すこし前まで幾たびもそうしたように自分がそこを
訪れて来たように感じられるのである。この北の国の怪しい僧
房には、必要の最小限の道具を除いて何もなかったが、同じよう
に、今主水正をとりこめているような煩わしさは何一つなく、ア
イヌで啞だった主水正とこの貧しい坊さまとが浮世をはなれた和
やかな心持で、何の不足もなく伸々と、永い夜を語りあかしたも
のだった。話すことがなくなれば、どちらからとなく黙り込み、
睡くなればお互が断りを言うこともなく、目を閉じて、うとうと
するのであった。

覚円は灯をつけて、その僧房ではない部屋をぽつと明るくしな
がら優しく主水正の顔を見上げた時その凛々しい目もとの曇りに
気が附いた。

「お久振りじゃな」

と、自分も思わず染々と言つて、

「まあ、お座り」

と、嘗て、木の枝で囲炉裏の埋れ火を掻き立ててくれたと同
じ手附で、これは立派な桐の火鉢の火を掘起して、主水正にすす

めてくれた。

「夢のようです。いつ、おいでになりましたか？」

「今日」

覚円は明るく笑つた。

「多分こちらだろうと思つて、ひとまずお訪ねしたわけじゃ。
大分苦勞をなされましたの。お瘦せになったように思われるが
……」

「……………」

多くをいわぬ二人である。ただその目と目で、口が草臥るほど
話すよりも沢山のことがお互の胸に通じるのである。

「それにしても、よく……」

「おお、そういえば、ひどい目におうた。漁師に頼んで小舟の底
に隠れて海を越えて来ましたのじゃ。それも愚僧がとんでもない
失策をやったからじゃ。まんまと赤崎屋に裏を掻かれて、殺さず
ともよかった母子を死なせましたわい」

覚円は、これをいつて暗然とした。

「それはそれとして、貴方も相変らず狙われているようですね。
愚僧もこちらへ来たばかりで、思いがけないお客さまがたのお見
舞いを受けて実は仰天致したよ。しかし、むこうの狙っていたの
は貴方だった」

「今あちらで聞いて来たばかりです。お怪我がなかったのは何よ
りでした」

覚円は短筒を見せた。

「なに、こんな便利なものを、赤崎屋がくれたのでね」

と笑った。

「ただ、後の証拠に捕えて置こうと思ったのだが、あいにくと、弾丸が一発きりだったから、まさか、むこうが二人だろうとは考えなかったことで、掛替のない弾丸を撃って終ってからは心細いお話し。仕方がないから、手負いの奴も返してやることにして、むこうに引取って貰ったのだがね。しかし、ありゃアやはり、あちらの方角から奇越したものだろう？」

「無論です」

「困るなあ」

覚円は、眉をひそめた。

「まだ、お目にかからぬが、こちらの御主人は？」

「弟ですか？」

と、主水正は色のない声で言った。

そうして、懷中に手を入れたと思うと、一通の手紙の、封を切ったのを取出して、覚円の前に置いた。

「弟の置手紙です。弟は家出をしました。何ということでしょう。私は、弟の家庭を毀しに帰って来たのも同然のことになったのです」

覚円は、無言で主水正を見詰めた。

「拝見しても宜しいか？」

と、それまでと変らない声で言った。主水正は黙って頷いて見せただけだった。覚円は、手紙を拾い上げた。土屋喬四郎がお美

津の家で、筆墨を借受けて、お美津の母親に後で屋敷へ届けてくれと頼んで書残して行ったものだった。

覚円は、行燈の傍へ寄って、この手紙を開いた。朝に近い空気はひっそりと沈んでいる。主水正は急に顔を変え、膝を浮かした。この静けさの底に、引戸の彼方に、暗い廊下を遠ざかって行く微かな衣ずれの音を聞いたのである。

主水正の頭の中に、燃える花のように、織江の美しい姿が立っていた。その躰音と、姿とが結び附けられていた。

喬四郎のことを案じて、ぬすみ聴きしていたのだな。鳥の羽叩きのように閃いたこの感動もただ主水正の心の傷口に新しく血を吹出させるだけのものだった。

主水正は両眼を閉じた。

どこかで大勢の人間がどっと笑う声が聞こえたように思った。

主水正には弟の早計が呪わしかった。また、こうして、いわば底無しの沼のような破目に求めて陥込んだともいえる自分に、心からの憎しみを感じずにはいなかった。

ひとり、覚円は、夜気の水のような静けさの内に、さらさらと手紙を繰ひろげて行くのである。

人はどこへ行こうが暮らして行けるというものではないのだ。

喬四郎はまだそれを考えない。考えないのは、支度してなかったというものの、多少の金子を持っていたからである。これが直ぐと窮乏に入ることだけを免れさせてくれた。またこれからどこへ行っても何をするかを、落ついて思案するに足る頭が熱し過

ぎている。どこでもいい、知った人間のいない遠くへ行くことである。それだけである。感情の火は、一つの途を走っているだけだった。不安はあった。行末は闇だ。けれども奇怪なことには、それが喬四郎の一念を挫くこともない。反って、自分がこれから一歩一歩に不幸に陥入って行くのだと考えることに不思議と悦びに似たものが感じられることだ。いくらでも、いくらでも不倖せになれ。そう成るほどいいのだ。はじめになれるだけ、はじめに。

兄。

織江。

闇の往来をどこへというあてもなく歩きながら絶えず、喬四郎の脳裏には、この二人の姿が描かれているのだった。

ひとりぼっちなのだ、俺は。

だが、なアに、もう帰りはしない。いよいよとなったら、どこかで野仆死をするだけの話だ。人の目につかない山の中の草の上で。

暗い空想はそこまで行っていた。

酒が欲しかった。しかし、こんな夜半にどこだって起きているところはない。

廓は？

喬四郎は苦笑いを含んだ。

「ちょいと……旦那」

ふいに、こう呼止めた者がある。男は塀の蔭から急に出来た

と思うと、喬四郎の左側面へ風のように音もなく寄添っていた。この素早い動作と声をかけたのと殆ど、同時だったといつてよかった。

「どちらへ行らっしゃいます？」

「俺か？」

相手は町人だった。痩せて皺だらけの年寄だが、目に鋭い光がある。

「へえ」

抜討に備えてびたりと身を寄せて来る油断のない物腰や、目附から、その辺の岡っ引と、すぐに吞込めた。喬四郎ははっと思った。

「怪しいものではない」

「……………」

男は、無言でいた。鋭い視線は、喬四郎の顔からはなれないのである。

「御浪人さんですか？」

「そうだ」

「お住居は？」

「無礼であろう」

ぱっと、男は、年寄とは思われぬ身軽さで後へ飛んだ。それと一緒に、いつ手繰出したものか一筋の縄が喬四郎の左腕に絡んで、地面に蛇のように躍っていた。思わず、かっとして、刀に手がかかっていたものの、喬四郎はその怒りを自制した。

「あわてるな」

と落着きはらって、縄から腕を抜きかかった。

「南の土屋喬四郎だ」

「……………」

「組頭の者に訊いて見ろ」

「ほんとうでございますか？」

喬四郎は、笑って見せて、捕縄を投返した。

「ここは、どの辺だ？」

「へ？」

「どこいらだというのだ？」

「御存じなく、歩いていらっしやるんでございますか？」

これは、訊き返すのが無理のない問いだった。

「どの辺を歩いていらっしやるとも御存じねえで……歩いていらっしやる……こりゃアどうも、ちつと変じゃございませんか？」

「むむ」

喬四郎は、重苦しく笑顔を作るよりほかはないのだった。

「そうさ。そのことでお主に頼みがある。今夜私にここで会ったことは、一切他人に漏らさないで貰いたいのだ」

「……………」

「ほかのことでなく、私は出家したいと思っているのだ」

岡っ引の老人は、まだ警戒を緩めていなかったが、怪訝らしく

相手の若い顔を見詰すにはいられなかった。

若者の顔は真剣らしく見えた。冗談を言って年寄をからかっているとは見えないのである。

「はアてね。どう仰有るんでございます」

と言った。

「なに……こうして生きているのも、つまらなくなったのだ。倅いと、私がどうなろうと心配してくれるような身寄の者もないし……何をしようと勝手なのだ。じゃアまた、縁があったら遇おうよ」

「お待ちなさいまし。して、……おかしいな。どちらへ行らっしやいます？」

「あてはないさ。自分の歩いているところを知らないで、他人に訊く男だ」

「しかし……ねえ……」

老人は、いつの間にか、この妙な若者に惹附けられていた。自分の、死んだ倅がちょうど同じ年配だったというだけでなく、嘘や冗談のないらしい相手の様子が気がかりで、こんなに若くて、そんなことをして、一体いいものかと、いつか相手の若者らしい一途の決心を制めたくなっているのだった。

「困りますねえ、どうも。身寄の方がどなたもいらっしやらないと仰有るので」

「あっても、顔を見度ないのだ」

「ははあ、それだ」

「なんだ？」

「いいえ、まあ。お若い内はどうしても、一度思い立ったらは是が非でもそれを徹さなくてははいけねえようにお考えになるのは、こりゃアごもつともでございましょうが……いや、よくお考えになることでございますよ。坊主になったって決して面白いことはございませぬぜ。ねえ。それに当節は、こちらで坊主になろうたって、そう、あっさり先方で承知してくれるもんじゃありませんや。そう素人の坊さんが沢山出来たら、ほんものの坊主が口が乾上って迷惑致しますことさ。そりゃアそれとして、まだ夜明けには間がございます。むさくるしいところじゃアございますが、倅いと手前の家がすぐそこですから、朝までお休みになつては如何でございます。へえ、手前だって無理に御意見はいたしませんよ。お考えになつてそれでもどうしても御出家になるというのならこりゃア仕方がねえ話だ。ただ夜露に濡れて、それも、それというあてもなしにお歩きになるのじゃアこりゃア毒だ。悪いことは申しませぬ」

と、目附に似ず親切な男だった。喬四郎は、また躊躇ためどつてゐる。しかし、まったくの行く先の思案もない心細い身に、男の親切は有難くて、では、朝まで厄介になろうといった。

「そう、なさいまし」

と、老人も悦んで、

「何かいわくのある方とは存じましたが、さきほどは失礼いたしました。なアにこの頃は悪い浪人者が出ますので、ひょっとそれ

かと思ひましたので」

と、自分も捕縄を懷中へ藏しまつて、喬四郎を案内して歩き出した。小梅の勘助というのがこの老人の名前だった。

次の朝その岡っ引の老人は、橋場に、黒い板塀をめぐらした小ぢんまりした家の腰門から内へ入った。この近所は大川を前に待乳まちう山の森を控え、船板塀に見越松といったような粹な寮風の家が多い中に、この一軒だけは、芸者の中にたった一人だけ野暮な屋敷女を座らせたように、建物も塀も古びて何となくぶしょったく感じられる点で人の目を惹いた。近所では星見の旦那と、あっさりいっているが、蘭医小此木述斎おこぎのじゆさいの屋敷なのである。星見というのは、述斎が専門の医療の方は殆ど言訳だけで地学や天文の研究に凝こつていて、交際も専らその方面に偏ひとへっているし、もと住っていた麴町の屋敷を捨ててこの橋場へ移うつつて来たのも、つい近くに幕府の天文台があるためだったというくらいなのを、変り者扱いして、いったものである。

勘助が勝手口へ声をかけて庭づたいに行くと、落葉して透いた植込み越しに、書斎にいる述斎の姿が見えた。いつものように、本や古反古はこを散らした中において頻しばしばと何か読んでいたのである。

勘助が庭石を拾ひろつて歩いて行くと、述斎は顔をあげて迎えた。

御用聞ごようきをしている勘助と、世間に縁の遠いこの篤学者とは勘助が今は息子にさせている植木屋をやっていた頃との関係で、述斎

の父の代から出入りしているこの老人に好意を持っていたし、勘助の方では学問のことはわからないなりにこの篤学者に人並以上の敬意を持ってずっと親しくしているのだった。今朝呼ばれて来た用談というのは、日あたりのいい濡縁で簡単に済んだ。

「どうだね、近頃は？」

と、人が好意を感じている人間にしかいわないこの無意味な言葉をいって、述斎はにこにこした。

「へえ」

勘助も、日なたで、皺の中の目を糸のように細くした。

「変ったことはないか？」

「ございませんねえ」

と勘助の返事は素気なく思われるくらいだ。腰の煙管筒を取って、前の日あたり俵が来て手入れをした庭を見廻しながら、抜くのだった。

「おお、そう、そう……」

と急に思い出したらしい。

「珍しいっていえば、こうでございますよ。昨晚のことなんで……変なお武家さんに会って家へお連れしてまいりましたが……いま時急に出家をなさろうなんて、発心する方があるもんでございませぬえ。それが、まだお若い方なんです……」

「ふうむ？」

述斎は、煙管を咥えた勘助の横顔を見詰めた。

「どうしたんだ？ 困者かね？」

「いいや、れっきとしたお旗本です」

「誰だ？」

「そりゃアいえないことになっていますが……」

勘助は約束に忠実だった。

「ははははは……」と、述斎は笑った。

「なアに聞かなくなつていいがな、ほんとうかい。しかし今のよいうな世間に、ないことでもなかるうが、発心の動機は何だ？」

「それも、あんまりお話しにならねえんですが、決して嘘を仰るような方じゃありません」

「えらく、肩を持つな」

述斎は、薄く笑った。

「旗本で、小普請か？」

「いいえ、ちゃんとしたお役のある方でございます」

「じゃア何から何までうっちゃる覚悟なんだな。それが真実なら、大分思い切りのいい変った男だ。ふむ」

と、述斎は唸った。

三十七歳というにしては、いつも本ばかり見ているせいかな寄染みているその顔附は、遽かに真面目なものになって、徐ろに細い顎を撫でながら凝と勘助を見詰めた。

「どういうわけで、そんな気になったものか？ ちょいと聞きたいものだな。名前ぐらいはいずれ、自然とわかることだろうが……その発心の動機だ。というのは、こちらに少々心当たりの話があるのぞな」

と、いうのである。

「この辺でございましょうな」

例の赤崎屋に抱込まれている稲荷堀の御用聞伊三が、こういい出して、一同は立止った。

夕闇が降りていたが、目あての勘助の家のある小梅村はすぐ目の前にあるところだった。土屋の家に入っているお美津が桐太郎の見舞に戻って来ての話に、一同は土屋喬四郎の家出を知ったのだった。赤崎屋吾兵衛の頭には直ぐと、「こりゃア何とか一狂言打てそうだ」とひらめいて、相良、跡部と三人が車座になって談じ合う前に、ともあれそちらの行方を探って貰おうと、稼業がら伊三が頼まれて出掛けて行つた。と思うと、小梅の勘助の家に匿まわれているのがそれらしいと、思いがけなくらい早く嗅ぎつけて来たのだった。

「青山へは知れているだろうか？」

「さあ、そりゃアどっちともわかりませんが……師匠に聞いて御覧なさいましたら」

師匠といえはお美津のことだ。

「むむ」

と、赤崎屋は難しい顔色になって考え込んだ。

その晩、跡部、相良と集って相談して、

「こりゃア逆に、主水正を誘い出す罠に使ったらどんなものだろう？」

う？」

と、いうことに腹がきまつた。

夜霧の深い晩だった。伊三が案内で、相良典膳を囲んで、その腹心の弟子に、赤崎屋の用心棒の浪人と、合せて七人の大勢である。小川の縁に藪があったので、一同はその蔭に隠れた。

「来るかな」

「来ずにや置きますまい」

と、伊三は、自分が今夜の舞台廻しをつとめているのが得意らしく、鼻をうごめかした。

「来ればこの道だな」

典膳は頭巾の蔭に光る目で、自分たちが今辿って来た道を振り返った。

「へえ、一本道でござえます」

「駕籠で来るものでございましょうな」

と、浪人組の一人が傍から話掛けた。

典膳はこれに答えないで、

「弟の奴が出て来ることも考えなければならぬ。いることは確かなのだな？ 念のために見て来て貰おうか？」

と、伊三に言った。

すぐと伊三は往還へ出て、霧の中をすたすたと歩き出した。人家のある所へ出るのには二三町ある。その間はずっと霧の海である。伊三は、昨日も、一度来た小梅の勘助の家の傍まで来て立止った。

伴が植木屋をしている勘助の家は、商売物の木々を植え込んだ畑を控えた古い百姓家である。伊三は溝を越えて横手の梅林から家の裏手へ抜けた。

稼業こそ一つだが、大川を隔てて所属の組も違っている伊三はまだ小梅の勘助に面識がない。土屋喬四郎らしい侍がここにいることを知り、それと確めたのも人伝てに聞いたことを、やはり外からそれとなく覗いて見きわめたものだったので、建物に近寄るにつれて自然と蹙音を忍ばして、泥棒猫のような姿勢になった。夜は更けているし、霧は深いのである。

亭主の勘助らしい老けた男の声が聞こえたので、雨戸の隙間を探して、そっと目をあてた。

「もう、そこちちお見えになるのでございましょう」と、その声がいう。

(はてな?)

おかしい、主水正と和解が出来たのだろうか？ 伊三の目は、隙間を漏れる灯影ひかりかげに向って鋭く光った。

六畳ばかりの狭い部屋で、こちらに背を向けている白髪頭しらぎは、勘助だが、さてこれと向いあって上座にきちんと座っているのは武士ではない。

若い町人風の男なのだ。

すると……ひょっとすると喬四郎はもうどこかへ出て行った後か？ 伊三の不安はこれであつたが、

「それにしても、いろいろと世話になった喃なん」

というその町人の声にひかされて、穴のあくほど顔を見ると、これは又意外にも土屋喬四郎の顔に違いないのだった。

伊三は思わず唸るところだった。それにしても、土屋喬四郎が、なぜ急に髪形の形から服装まで町人に姿を変えたか？ 不審なことであつた。

夜 駕 籠

「何、旅支度がしてある？」

相良典膳は、伊三の言葉を意外と聞いた。

「へえ。新しい脚絆や草鞋が上り縁に置いてあるんですが」

「じゃア、いよいよ屋敷へ帰らずいずれへ行くものと見えるな」

「左様でござりますよ。町人の服装をして……うっかりすると、主水正の奴ア間に合いませんぜ。なにを愚図愚図していやがるんだか」

と、伊三は伸上って、藪越しに往来の方を覗いた。

道は夜霧の底に沈んで、ひっそりとしていた。手前の藪がさやさやと戦ぐだけである。

典膳が暗く笑った。

「間に合おうが間に合うまいが、来てさえくれれば、こちらはいのだ」

「いや、まいります分には間違いございません」

伊三は今夜の自分の膳立に自信を持たずにはいらなかった。

端から見ただけで弟思いの主水正が、お美津のいうほど今度のこととで動転しているものなら、行方を聞いて、なんで捨てて置くこ

とがあろう。ただ、ひょっとすると、その坊主って奴が附いて来るかなと思われるだけで、主水正が来ない理由は考えられないのだった。

急に一同は聴耳を立てた。霧の中から人の聲音が聞こえて来たのである。

「来た！」というように、互が目を見合せ、伊三が道まで覗きに行った。

霧の中に提灯が一つ黄ばんでばやけて揺れながら来る。駕籠らしい形が見えた。伊三は手を挙げて合図をした。一同は出て来ながら手に手にすりりと刀を抜き放った。典膳の目配せで、これを後ろへ背中に隠した。

駕籠は来た。辻駕籠であるが、仲間が一人尾いている。

ぬっと典膳が出て正面に廻ったのを合図に、一同がばらばら走り出た。

「何をする！」

仲間の声だった。駕籠屋は、駕籠を捨てて一目散に走った。その途端に典膳が手を振ったと思うと仲間があつと叫んで、地に仆れた。

争って、一同は駕籠の中へ刀身を突込んだ。

うーむと呻く声が聞こえた。

「しめた！」

伊三が叫んだ。

「卑怯！」

駕籠の中から叫んだ。

これに反って挑まれたように、垂れ越しに突いた。垂れは、ずたずたに切れてはずれた。

「引出せ」

典膳が命令した。

伊三が残っている垂れを引きちぎって、手負いの腕をつかんだ。

その刹那に、

「誰か来た！」

と叫んだ者があって、伊三は熱いものにさわったように後へ飛んだ。一同もぎょっとして振返った。

今の騒ぎを聞いて駆附けて来る者があるのである。みだれて聞こえる躰音に続いて、

「その辺らしいぞ」

と、ふとい男の声で叫んだ。

典膳は、見咎められてはならないと思った。

「ひけ！」

一同は逆の方角へ黒い波のように一度に走去った。ひとり残っていた典膳は、止めを刺すことを考えていたのである。しかし、その人数が一人でなく、霧の中に意外に間近いところまで来ているのに気が附くと、遺憾をとどめながら、味方の後を追って走って行った。

「お、駕籠だ！」

真っ先に走寄って来て、こう叫んだのは星見の先生小此木述斎だった。無論、これから勘助の家を訪ねようとする途中に、この異変にあったのだらう。

「や！」

と、血の匂いを嗅ぎ知って棒立ちになった。

小此木述斎は、その駕籠へ乗って来たひとの後を追って来たのではないかと、愕然とした様子で、飛附くように駕籠の中を覗き込むのだった。

「や！」

と再び叫ぶ。

その声に、連れが肚胸を衝かれて駆寄る前に、述斎は叫んでいた。

「御前、御前！ 小此木でござりますぞ」

人々は驚愕した。

「なに、御前が？」

「南無三！」

と、口々に叫ぶ間に、一人の男が、地上に落ちて消えていた提灯を拾って、いそいで灯をつけた。

駕籠の中には、一人の十徳を着た法体の老人が、肩を抑えて瞑目している。その手の指が血に染まっているほかに、十徳の胸や膝に目もあてられぬ刀痕を残しているのだった。

述斎は目配せして人々の手を藉り老人を駕籠から外へ出した。一人が手ばやく自分の羽織をぬいで、敷物にした。医師だった述